

二丁掛磁器タイル(227×60)・名古屋モザイク二丁掛特注品(215×60)

工事請負契約では45二丁掛磁器タイル(95×45)が張られ、タイル割付に収まる窓・カーテンウォール・事務室通用口・倉庫扉が施工されることになっていた。しかし、竣工建物には名古屋モザイク二丁掛石器質タイル(215×60)特注品が張られている。

建築確認申請では、外壁タイルは二丁掛磁器タイルとなっている。このタイルは博善斎場の外壁タイルと同じものである。確認申請審査において、主動力源が灯油焚から電力に変更されて確認申請が下りている。

五洋建設(株)と(有)丸倉共立商事が交わした工事請負契約では外壁タイルが二丁掛磁器タイル(227×60)から45二丁掛磁器タイル(95×45)に変更されている。この変更は、主動力源の変更により生じた工事費増を補う工事費予算調整によるものである。

竣工後に受領した竣工図には外壁タイルとして二丁掛磁器タイル(227×60)が記載されている。しかし、竣工建物外壁タイルには名古屋モザイク二丁掛石器質タイル(215×60)特注品が張られていた。

竣工図には建築確認申請書に記載されている予算調整前の二丁掛磁器タイル(227×60)が記載されている。このことは(株)博善社が工事請負契約で外壁タイルとして張られることを承認した45二丁掛磁器タイル(95×45)から二丁掛磁器タイル(227×60)への変更を求めていたことになり、更に名古屋モザイク二丁掛石器質タイル(215×60)特注品への変更が行われている。この変更は、二丁掛の形状を維持しつつ、45二丁掛磁器タイル(95×45)割付によって決まった窓・カーテンウォール・倉庫排煙窓・事務室通用口・倉庫扉サイズに、より近づけるための変更であることが検証により判明した。

この変更には規格タイルサイズ227×60から215×60に変更する必要があり、何故、二丁掛磁器タイルによるサイズ変更ではなく、名古屋モザイク二丁掛石器質タイルを用いた変更であったのか、磁器質タイルと石器質タイルについて検索してみた。

図面記載の二丁掛磁器タイルは施釉され、1250℃以上の高温で焼成されたもので、吸水率が最も低い1%以下に抑えられ、水を吸いにくいため冬季に内部に浸透した水分が凍結してもタイルが破損しにくく、耐凍害性に優れたタイルである。

名古屋モザイク二丁掛石器質タイル(215×60)特注品は、無釉タイルである。また、石器質タイルで、1200℃前後で焼成し、吸水率が5%以下のもので、天然の石材に近い吸水率のタイルである。

施釉と無釉

焼成によって溶けたガラス質の被膜のことを釉薬と言ひ、タイルの表面に釉薬が施されているタイルを「施釉タイル」、釉薬の施されていないタイルを「無釉タイル」と言う。

無釉タイルは、釉薬を施さないで焼成したタイルで、素地をそのものの色を味わいとする無釉タイルの色には、粘土自体に含まれている鉄分などの呈色によるもの(土ものタイル)と、白色の素地に顔料を(酸化金属など)を添加配合して着色するもの(練り込みタイル)がある。

施釉タイルは、釉薬に含まれる顔料により表面の色を作り、素地別に見ると、白い素地のものに釉薬を施したタイルと鉄分などを含んだ有色素地のものに釉薬を施したタイルがある。

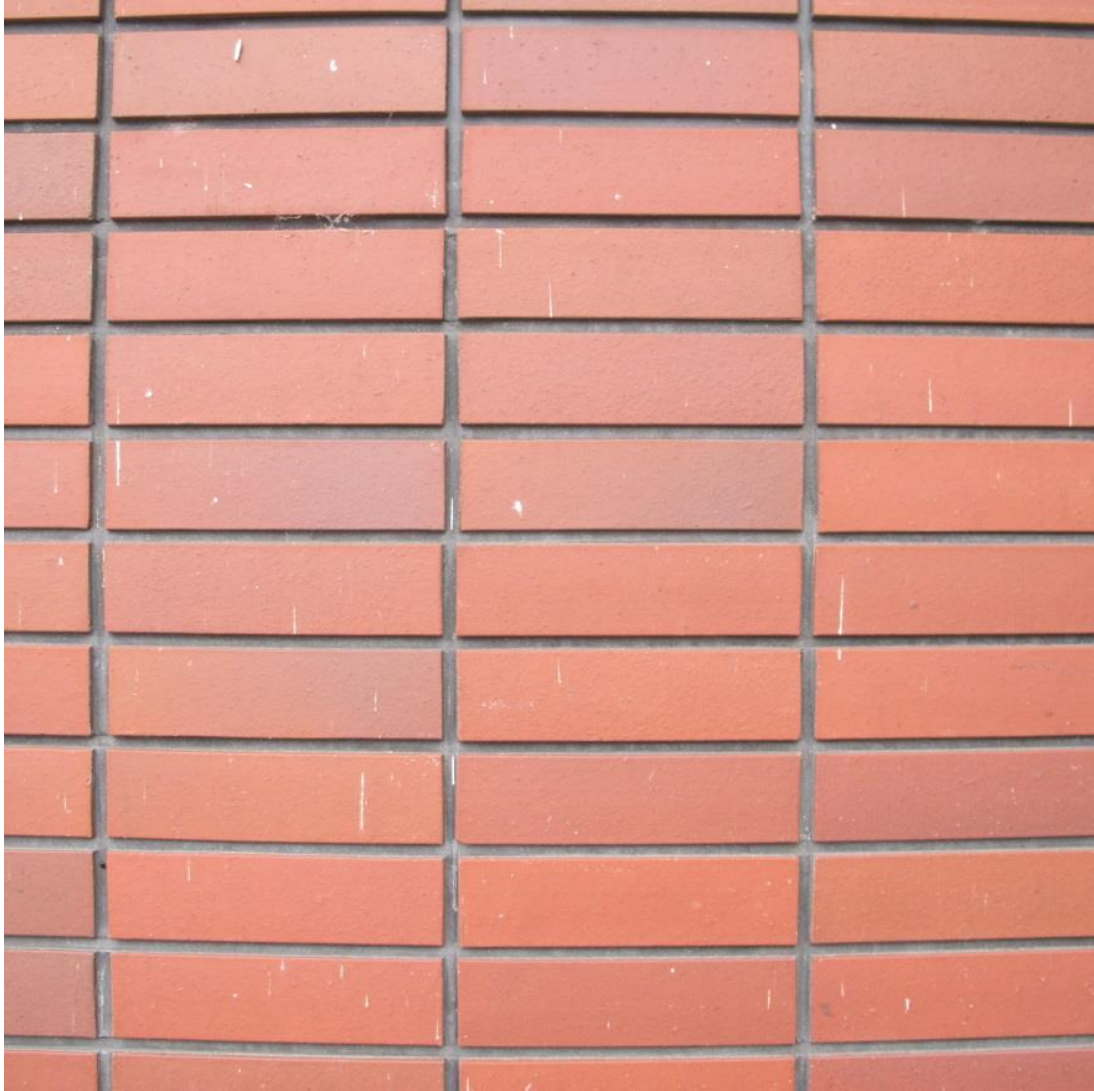
施釉タイルより無釉タイルの方が価格は高い。

タイルのサイズ変更は、発注時にタイルのサイズを指定し、成形され、焼成され、製品となる方法と、規格タイルを求めに応じたタイルサイズに加工するという二通りの方法が行われる。

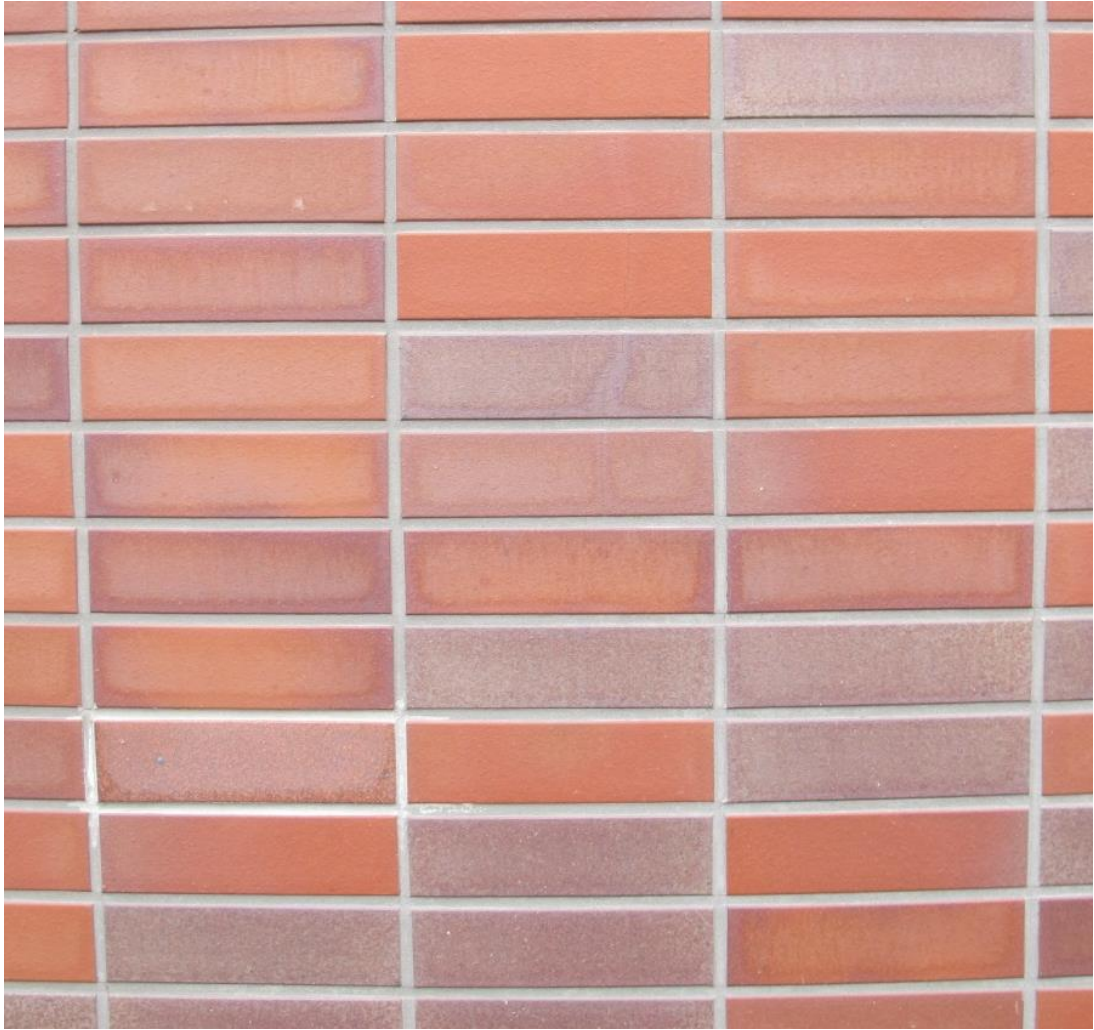
タイル加工が大量の場合は工場加工が行われる。

二丁掛磁器タイルは釉薬噴霧焼成により角面が丸みを帯びる仕上げとなり、加工を行うと加工面が鋭角な仕上がりとなり、研磨を行うと施釉部分を削り取られることになる。他方、無釉のタイルの場合、加工を行っても加工前の断面と同じ仕上がりとなる。

博善齋場 二丁掛磁器質タイル(227×60)



名古屋モザイク二丁掛石器質タイル(215×60)特注品



名古屋モザイク二丁掛割肌タイル(215×60)特注品 一部張り付け

